

東京陵水

暑中御見舞
陵水会東京支部役員一同

目次

1	面	平成十八年度支部総会
2	面	福田経済学部部長挨拶
3	面	堀川理事長挨拶
4	面	新会員の所感
5	面	高安元支部長逝去
6	面	総会特別講演要旨
8	面	「こんにちは」
14	面	還暦からのピアノ・油彩・水彩
15	面	今春の五陵会・大学八期同期会
16	面	ゴルフ談義
17	面	彦根コンフィデンスシャル
18	面	年会費納入者

陵水会東京支部総会は、晴れ間のとほしい今年の五月の空の下、十六日（火）午後六時から、千代田区永田町二丁目、首相官邸が近接の、キャピトル東急ホテル「白真珠の間」にて開催された。本年度の総会運営には大学十八回卒の諸氏が当った。運営に当り十八回同期はそれぞれ業務多忙な中、打ち合わせ会を数次にわたり開き、支部事務局とともに会の成功を期して手を尽くしていた。当日の出席は最終的には百名近くに達し、例年並の規模の開催となった。出席者数の増加への取組みは、現状を打開するための大きな課題の一つである。

昇教授をお招きした。守谷貞夫幹事長（大12）の司会、開会の挨拶のあと直ちに議事に移る。

先ず宇治原嘉政東京支部長（大7）の挨拶（要旨）。

「この数年來、支部会費納入状況が減少傾向を続けてきたが、昨年漸くそれに歯止めがかかり増収に転じた。当然のこと

平成十八年度東京支部総会

大学制度の大変革期に対応し 陵水会の向かうべき方向を問う

ながら東京支部会員の本部会費の納入状況も昨年より好転し、

論に、副支部長の西坂氏（大9）が講師陣の一員となられた。今年秋にはCSK会長の青園氏



議長に菅方海三前幹事長（大4）を選出、議長挨拶の後議案審議に入った。

来賓に滋賀大学経済学部長福田敏浩教授、陵水会理事長堀川馨氏（大7）、松下電器産業副社長戸田一雄氏（大12）、陵水会大阪支部長光橋貢氏（大6）、陵水会名古屋支部長小島興一氏（大10）をお迎えし、特別講演

の講師には筑波大学大学院小倉

会費、支部会費とも口座振替を

進めていきたい。

当支部の会員数は圧倒的に現

第二号議案について。平成十八年度事業計画並びに収支予算

役が多いが、会費の納入や諸活動への参加になると退職世代が多いという状況にある。業務で忙しい現役世代を如何に取り込んでゆくかということが課題。これからの時代は、よりよい雇用機会や新しいビジネスチャン

総会議事に移る。

議案に菅方海三前幹事長（大4）を選出、議長挨拶の後議案審議に入った。

第一号議案について。平成十七年度事業報告と同年度収支報告を田村寿夫事務局長（大12）が説明。この報告について高木

録および収支計算書について、定時総会並びに幹事会の決議に

報告があった、この後第一号議

案が承認された。

計画が、前項に続き田村事務局
長から説明された。第二号議案
も出席者全員の承認を得た。

平成十七年度収支報告

(単位円)

○財産目録

現金 一八、三〇九

普通預金 三八五、一五六

定期預金 一、〇六〇、〇〇〇

郵便貯金 一、八二七、四六〇

電話加入権 七四、九八四

合計 三、三六五、九〇九

○貸借対照表

借方

現金・預金 二、二三〇、九二五

基本金引当預金

一、〇六〇、〇〇〇

電話加入権

七四、九八四

合計

三六五、九〇九

貸方

一、〇六〇、〇〇〇

基本金

二、三〇五、九〇九

合計

三、三六五、九〇九

○収支計算書

収入の部

五、一一六、三三三

年会費収入

一、五五二、〇〇〇

前年度繰越金

二、三五六、八八五

支出の部

五、一一六、三三一



福田敏浩教授 挨拶

午後六時半に議案審議が終了。
来賓からご挨拶をいただいた。
滋賀大学経済学部長

通信費 七二六、六八二
印刷費 五二六、一一〇
次年度繰越金 二、三〇五、九〇九

○平成十八年度収支予算書

収入の部 五、二九二、〇八九

年会費収入

一、六〇〇、〇〇〇

前年度繰越金

二、三〇五、九〇九

支出の部 五、二九二、〇八九

総会費 八五〇、〇〇〇

通信費 七二〇、〇〇〇

印刷費 五二〇、〇〇〇

次年度繰越金

二、三〇七、〇八九

近況について主要なトピック
スに限って報告をいたします。
第一点は志願者の数が昨年より
三百三十人増えました。全国の

経済学部が多くが志願者減に見
舞われている中で、私どもは増
えたということです。昼間主で
入学定員が五〇〇名、志願者数
が三五九四名、名目倍率が七・
五倍でした。二三九五名が実際
に受験をしたので、実質の倍率
は四・八倍でした。今年は例年
になく優秀な学生を確保するこ
とができました。この少子化の
時代に大変ありがたいことだと思
っています。第二点は就職が
好調でした。五四七名が卒業し
て、うち四二五名が民間企業へ
の就職を希望していたが、その
九十六パーセントが就職するこ
とができました。私どもの経済
学部は世間に広く認知されてい
るのだと喜んでいきます。

た。これは私ども非常に喜んで
おりわが経済学部は形の上では
東大と並んだなと思っているの
です。

な計画で、経済学部に関しても、
学部と大学を入れますと七十四
項目になっています。その膨大
な計画を学部長が先頭に立って
達成していかねばいけない。

現在、国立大学法人には逆風
が吹いております。行財政改革
の影響で経費削減と人員削減の
嵐に見舞われております。国立
大学は国立大学法人へ大きく変
わりました。国立大学の時代は
滋賀大学は文部省の出先の官庁
だった、したがって滋賀大学は
「滋賀大学庁」と言っておりま
した。これが国立大学法人に、
いわば国設民営大学に変わった
ということです。設置者は依然
として国です。ここで働く者は
民間人であるということです。
私どもは二年前の四月一日から
国家公務員ではなくて民間人に
なったのです。ただし純粋の民
間人ではなくて、刑法上は公務
員、みなし公務員というわけで
依然として窮屈です。次に国立
大学法人になって六カ年の中期
計画を立てなければならぬ。
計画を立てなければならぬ。
教育と研究を預かる現場として、
計画を自ら自主的に決定してこ
れを達成しなければならぬ。
計画目的について決定するのは
文部科学大臣です。我々はこの
目的を達成するために計画を立
てなければならぬ。実に膨大

中期目標中期計画制度といいま
す。これには評価が結びついて
います。文部科学省の中の国立
大学法人評価委員会が、六年後
に国立大学の中期計画が達成さ
れたかどうかを評価するので
す。また行政改革の本丸である
総務省に総務省評価委員会があ
り、財務面の評価をします。無
駄遣いはいないか、効率的経営を
やっているかと。非常にわれわ
れは窮屈になったなと思いま
す。この二つの評価を受けて私
どもが立てた計画を達成してゆ
く。計画の達成如何で国からの
運営交付金が増えたり、減らさ
れたりします。一種のノルマ制
でつらいところですが、計画を
立てて文部科学大臣に上申して
認可を受ける。二年前に計画を
立て上申したら、このままでや
れという命令がきた。私どもが
立てた計画ですから、達成でき
ませんでしたとの泣き言は許さ
れない。評価で交付金が増減さ
れますので絶対これを達成し
なければならぬ。政府筋は口
を開けば国立大学を自由にした

といいますが、全然逆です。現場はふうふう言っています。七十四項目をどうやって達成しようかと頭一杯です。わが経済学部は、教員が一〇五名います。これに対し事務員の常勤が五名です。これにパートが二人で七名体制でやっています。これは大変で国立大学への締め付けがうんと厳しくなりました。これが現場の実情ですので、是非これを他の方たちに吹聴して頂きたい。しかし泣き言は許されませんからこの制約状況の中で活路を見出し生き残っていかねばならないと、百十二名で頑張っています。

陵水会理事長

堀川 馨氏 挨拶

し、国からたんまりとお金を頂き、国からたんまりとお金を頂戴して発展させてゆこうということに焦点を定め日夜頑張っています。これまで随分陵水会の皆様には教育研究と財務面で多大なご支援を賜りましたけれども今後もし引き続きご支援賜りますようお願いいたします。

強くお願いして「滋賀大学で学ぶ」というテーマで必須科目の中にに入れていただきました。そして京都銀行頭取の柏原康夫さん(大11)に講師をお願いしたわけですが、今度は必須科目ですから、多くの一回生に内容のある講義が出来ると思っています。もう一つはこれは大学始まって以来で、OBが大学の授業を担当することです。「リीड

私は二年前理事長を拝命しました。私は小さな町工場を引き受けましてそれから後は苦労の連続でした。その経験と、大学が法人化して百年に一回の大改革期に当り、お前のバイタリティーと中小企業の発想で少し陵水会を変えてくれというようなことで推挙いただいたかと思ひます。法人化によって何をどうしなければならぬかと議論を進め、どうやら十七年度は色々計画を立てたことを一つ一つ実現をいたしました。

きないことを温かい目で、あるいは厳しい目で後輩を指導したいということですが、私の考えの中心にありましたことは「滋賀大学には特別の意味があつて入学したわけではないけれど、四年間で好い学生生活を送ることによってこの大学へ入るよりもよかつた」と思ってもらえるよう学生を変える力のある大学であつて欲しい、そのお手伝いをするのが陵水会であるということでした。そこで「ジュニア懇話会」を開催することとし一昨年十二月、まず東京支部長の宇治原さん、シャープの副社長をやられた桂泰三さん(本23)に第一回をひきうけていただきました。昨年第二回を東京支部の大原孝明さん(大38)、松澤進さん(大38)に講師を引き受けて頂きました。ところがいろいろの場合も四、五十人くらいのお出でです。私は学部長に「一回生を対象にするのに何故集まりが悪いんですか、集まりやすい時間帯を選んで戴いた筈です」が。第二回の時に学部長が言われるには、最近はカリキュラムが一杯で学生が混乱している様子だと、必須科目の英語の時間と重なってしまったというわけです。それで今年は学校側に



「リीड論」で昨年第一回が開かれました。東京支部の西坂徹雄さん(大9)と、マブチモーター常務の羽淵展世さん(大14)に担当していただきました。これは一単位の対象になりますので学生がたくさん集まって聴講して頂きました。提出されたレポートの印象では、どの授業で聞くよりも熱心に聞いて頂いた。先輩の話は非常によかつたと、すくなくとも先生の講義以上

次にわが経済学部を実学の府と位置付け、学生に対する教育目的をグローバルスペシャリストに置いていきます。地域に、日本全国に、そして世界に貢献しうる専門職業人という意味です。もつと判りやすいと彦根、東京、北京、ニューヨーク、パリ、ロンドンを闊歩する「現代版近江商人」を養成しようと言う趣旨です。そこでカリキュラム改革してびしびし学生を鍛えています。地域に、日本全国に、世界に貢献しうる人材を供給することで、わが経済学部の名声を高め入学者を増や

上には一生懸命に聞いて頂いたとは間違いございません。また、昨年彦根市へ恩返しのため、彦根商工会議所で、初めて陵水会主催の講演会を開きました。名古屋支部長の小島興一さん(大10)に講師をお願いしまして、「日本経済の動向と会社法の改正」の題で二時間講演をしていただき、商工会議所は一杯になりました。

午後七時過ぎから、筑波大学大学院・小倉昇教授の「真の企業価値経営への会計の役割」と題した特別講演(別ページ掲載)が行なわれた。

午後七時五十分から懇親会が司会を当番幹事の中村嘉秀氏（大18）が担当して開催された。始めに来賓の戸田松下電器産業副社長が、陵水会員の一段の結束と今後へかける意気込みを盛り込んだ祝辞に続き乾杯の発声を行った。

開宴後二十分後からアトラクションとして、ソプラノ歌手野田ヒロ子さんのコンサートが開かれた。当番幹事影山哲也氏（大18）から、野田ヒロ子さんが紹介（東京音楽大卒・アメリカ、イタリアに留学・海外、国内で出演入賞多数・藤原歌劇団員）され、クラシック、ポピュラーのなじみ深い歌曲が次々と歌われ、アンコールの盛大な拍手が送られ、それに応えてさらに数曲。終曲のあと、花束を宇治原支部長が贈呈した。最後までいつもとは違うのどかな雰囲気

気が会場を支配した。

会も半ば過ぎ、今年の新会員（大54）の紹介が行なわれた。

出席者は河北智光氏、肥田茂之氏の二名。本会の成功を支えた当番幹事の大学十八回生十二名が正面に集合し挨拶を行なった。そのあと来年度当番の十九回生の代表にバトンタッチのエネルギーが送られた。恒例の校歌、寮歌、逍遙歌がグリークラブOBの臼井靖氏（大6）の指揮の下に元氣よく青春の気概を合唱。閉会の辞で楠田迪彦氏（本24）が「あせらず、くさらず、あきらめず」をキーワードに元氣な陵水会をつくろうと挨拶。終宴は午後九時過ぎ。

先輩、同期、後輩、 この財産を大切にしたい

河北 智光（大54）

私は四月に三井住友海上火災保険株式会社に入社し現在（二〇〇六年六月）はちょうど研修の折り返し地点です。四月は研修所に缶詰にされ、朝のラジオ体操から始まり夜まで毎日のように社会人マナーから始まり保険約款を読み込み、グループワークを行うなど多種多様な研修を受けていました。辛い面もありましたが、今年は採用数も多

かったようで同期もたくさんいることもあり、楽しい日々を送ることが出来ました。また五月の一ヶ月間は平塚支社で営業実習を受けていました。ここでは先輩社員に同行し、代理店やお客様を訪問することや、電話での契約照会など基本的な業務を行っていました。そして六月は同じく小田原で事故の示談などを行う損害サービスセンターで



実習を受けています。この後七月にまた研修所に戻り二週間研修を受け、そこから本配属になります。まだ、配属先も決まっておらず毎日期待と不安が入り交じった日々を送っております。

私の大学時代を振り返りますと、部活に熱中した四年間でしたが、ゴルフ部に所属していたのですが、入部するまで私の頭の中では「ゴルフおじさんのやる遊び」だったため、運動神経

などあまり関係無いだろうと思入部したのですが、初めてボールを打った時、止まっているボールなのに、まっすぐ飛ばないどころか、ろくに当たらないことに驚いたのをはつきり覚えております。また、一緒に入部した仲間達は皆高校生の時に何かしらのスポーツを経験していた者ばかりでしたので、私のように中高と文化系の部活動をしており、運動は体育の授業の時だけ嫌々やっていただけだった者とは、運動神経も基礎体力も違い、入部当初から大きな差を付けられていました。しかし、せっかく部活動としてやるのなら下手なまま終わりがたくないと考え、練習の無い日も自主的に練習に行くなど、熱心に活動していました。元が元なので「学生時代ゴルフ部でした」と胸を張って言えるほどのレベルになれませんでした。今後たまたまゴルフに行っても、楽しめる程度にはなれたのではと思っています。そして何より四年間苦楽を共にしてきた同期や、先輩、後輩達と出会えたことが最大の財産だと考えています。

またある程度暇な時間が出来れば、近場から九州までいろいろな場所に車で出かけていまし

た。電車や飛行機と違い、地域ごとの特性が良くわかり勉強になりました。また、一、二回生の時に真面目に講義を受けていたため、四回生の時にはまとまった時間があつたので、一人旅で数カ国を旅してきました。異文化に触れたことももちろん素晴らしい経験でしたが、ユースホステルで出会った違う国の人達と酒を飲みに行ったり、アメリカでハリケーンに遭遇するなど、国内では体験できないことを経験できたことも、大学時代にしか出来ない良い思い出でした。

大学の繋がりは 大きな拠り所

肥田 茂之（大54）

盛大な会にご招待預かりまし



たこと、そして、先輩諸氏が快く挨拶させていただきましたこと、温かい言葉をかけていただきましたことに感謝いたします。

皆様お忙しい中での会なのにこれだけの方が集まるものなのかと正直驚きました。やはりた

くさんの諸先輩方から温かいお言葉をいただいたことは、一つの励みとなっております。

当日は同行営業で山梨の方に行った帰りでした、これからの参加に一抹の不安を覚えながらも、また必ずこの場に戻ってこようという気持ちを新たにいたしました。

私は日本パレットレンタルという会社で東京第二営業所に配属されました。そもそも弊社が滋賀大出身者の就職先としては決して大きな会社でござい

ます。社員数も二百名ほどの会社です。主な業務内容とい

ったところでしょうか。ただ、何分まだまだ不慣れな身でして、飛び込み先であれば無いか？これはどうなっているのか？聞かれても曖昧な答えで切り抜けることもまだまだ多く、社に持ち帰っては先輩に相談するのが日課です。

社会に出て困難に思ったのは、やはり自分を如何に保つかという

ことでした。大学時代ほどの仲間はおらず、また不慣れな会社の中で過ごすうちに、どこか自分の拠所を見失いかけてしま

いました。所謂五月病というものでしょうか。まさか自分がこの

のが正直な感想でした。会社の先輩や同期のものに助けられ切り抜けられましたが、やはりすぐに何もかもが新し過ぎる状況に慣れるのは難しいもので

す。自分では毎日、「焦らない、欲張らない」と言い聞かせていてもなかなかそうはいきません。同行営業についていけず、お客様とうまく接することができず、

ものでした。

総会当日、私は朝七時に東京を出発し、取引先を先輩と回った後、東京のほうに戻ってまいりました。直帰の連絡を上司に

入れて、赤坂で車を降り、首相官邸横を思い切り走ったのをよく覚えております。入った頃

は、既に講演会の中盤。少しばかりの悪い思いをいたしました。そうこうしているうちに、

懇談の時間に入り諸先輩方にご挨拶をと思っていましたところ、同期、河北君を見つけてました。

なかなか同期の顔が見えず、もしや私だけかと心配していた中での非常に嬉しい出来事でした。また、守谷輸送機工業の守谷様や、拓洋の中村様といった、私の勤め先をよく知った先輩や、その他先輩諸氏に温かいお言葉をいただきました。非常に楽しく、また励みになる時間を過ごすことができました。やはり大学の繋がりと

いうものは、非常に大きな拠所である。そう改めて実感しました。

訃報

高安規玖次(良雄)氏(本5回)

陵水会元東京支部長として、また陵水会本部顧問として永年にわたり活躍してこられた高安規玖次(良雄)氏が、去る六月二十五日逝去された。享年九十六歳。

通夜と葬儀は六月二十九、三十日に高野山東京別院(港区高輪)で、多数の陵水会関係者や実業界関係者参列のもと、しめやかにとり行われた。

勉強会を、お酒をいただきながらおこなった。勉強会の中心人物が高安先輩であった。

先輩ご自身の仕事の面で、チエコスロバキアとの関係があったことから、東京オリンピックの体操の名花チャスラフスカとのお付き合いもあり、彼女が大統領特使として来日した時も、一番目に会いに来たのが高安先輩だったそうで、羨ましいエピソードである。

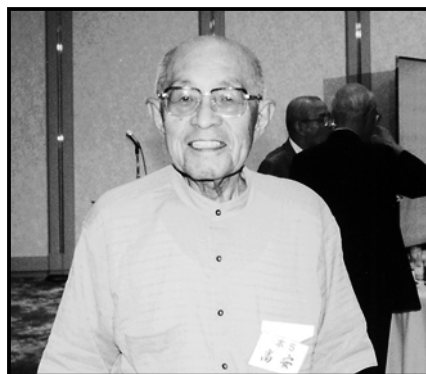
口を開けば、同級生で東レの常務になられた山岸さんのことや、グリコの宮本さんのオマケ戦略のことなど、先輩、後輩に対する褒め言葉は数知れず、批判の場合はユーモアたっぷりで座談の名手であった。

先輩は旅が好きで、信州、塩原、箱根と一緒したが、企画・交渉はすべて先輩がやられて、私どもはただついてゆくだけで面倒見の良い先輩だった。箱根の帰り、小田原のうなぎ料理の老舗でご馳走になったが、古い付き合ひのある店で、義理人情の厚いお人柄が偲ばれる。

正に「巨星落つ」の謂れ通り、陵水の偉大な先輩とお別れすることになった。

心からご冥福をお祈りいたします。

合掌



「巨星落つ」

葛上宗一郎(本20)

高安先輩に何らかの縁があり人柄と見識を慕う陵水会員が、毎月一回神田の「鳥ばたん」に集まり、A先生を交え宗教、哲学、政治経済と広範囲にわたる

彦根の銀座街に平和堂がござ
います。私は、平和堂の裏側
のすぐ近くに生まれました。そこ
に十八歳まで過ごしております
て、高校卒業後、神戸大学に入
り、大分大学、東北大学、筑波
大学と歩いております。父・栄
一郎がやっていたのと同じ科目
を研究することになりました

が、最初の大分大学でもまた東
北大学でも、一年生に対して必
修科目としての簿記の教育をや
ってまいりました。専門は管理
会計です。筑波大学に移りまし
ても会計を教えております。

さて、一九九八年の会計制度
の改革で、日本の会計制度は大
きく変わっております。今回、そ
れが企業経営にどんな影響を与
えるかという観点でお話をさせ
ていただきます。かつて大学で
勉強された簿記会計をちょっと
思い出してください。それと比
較して、新しい会計制度改革が
求めているものは随分違うん
ですよということを記憶に残して
いただければと思っております。

貸倒引当金の適正計上

一九九八年以来、会計ビッグ
バンということが始まって、そ
れまでの会計では十分できてな
かったことをきちんとやりまし
ようということになりました。

日本の会計ビッグバンは何をや
ってきたのか。例えば古い話に
なりますが、足利銀行の政府資
金の投入とか、U F J 銀行の貸
倒引当金の適切性ということが
問題になったわけですよ。

貸倒引当金を適正に計上する
ということはどういうことなの
か。ビッグバン以前の会計は、
貸倒引当金は税務規則で決めら
れていた範囲、例えば金融機関
ならば信用供与をしている債権
の五%が望ましいですよ、とい

平成十八年度総会特別講演(要旨)

「真の企業価値経営への会計の役割」

筑波大学大学院ビジネス科学研究科教授 小倉 昇氏

う規則に従って五%計上してい
ればよかったんです。一般の会
社ならば税務規則で三%程度に
定められているなら三%程度計
上すればよかったんですが、ビ
ッグバン以降の会計では、金融
機関なら信用供与をしているい
ろんな貸付金とかに対して将来
のリスクを見積もって、リスク
の段階に従い、非常に大きなリ
スクを抱えるものについては一
〇とか一五、二〇%という金額
を引当金として当てなくてはい
けないのです。できるだけ実際

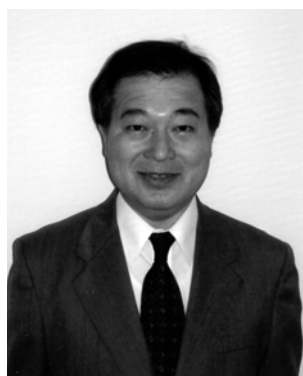
のリスクに近い金額を貸倒引当
金として計上しようという
ことになりました。そうすると
税法で決められたものよりかな
り大きな額になるわけですね。

データ集計の都合上、金融機
関を除いていますが、一九九〇
年から二〇〇五年までの東証一
部上場企業のうち、上位四〇〇
社くらいを見ますと、大体、売
上高はそんな大きな変化はない
んです。ところが、貸倒引当金
の額は九〇〇九二年には売上高

利益に非常に大きな打撃になる
可能性もあるわけです。

退職給付引当金

年金引当金でも大幅な改革が
行なわれ、その結果、年金の会
計処理をきちんとやりましよう
ということになりました。年金
引当金の改革はサラリーマンの
年金制度の改革に伴ったもので
すが、それまで退職給与引当金
と呼んでいたものを、退職給付
引当金と呼び直しました。一九



九八年以前の退職給与引当は退
職一時金に対する引当額を計上
しており、しかも税務上では決
算日現在に、全従業員が辞めた
としたら払わなければならぬ
金額の二〇%を計上するのが適
正なんですよ、と主張していた
わけです。各社ともその税務上
の規則に従って大体計上してお
りました。本当は決算日に全従
業員が一斉に辞めるということ
はないわけですから、今まで働
いた経過年数を考えてください

ということになります。

退職年金については一九九八
年以前は、積立金として別会計
にして無視してたわけですが

から、足りても足りなくても貸借
対照表に出てきません。それが
新たに貸借対照表に退職給付引
当金として計上しなければいけ
ませんよということになりました
。その結果、例えば富士通
は単体で四千億円、グループ全
体で八千億円の退職給付引当金
が足りなかったわけです。その
頃の富士通は力がありましたか
ら、単体分の四千億円は貸借対
照表に載せておくのは恰好悪い
から、一年で償却しちゃえと持
株を放出して埋め合わせまし
た。でもグループ全体の残りの
四千億円は五年間の繰り延べ
で、分割しての埋め合わせをや
っております。富士通以外にも
一千億円を超える退職給付引当
金の不足額のあった企業は二〇
社近くありました。

一九九八〇九年を境にして引
当金の計上額は伸びてきていま
す。どの会社も富士通のよう
力のある会社は一括償却という
形の一年で償却してしまいま
すし、力のないところでは五年か
けて貸借対照表に計上するよう
にしてきております。二〇〇四

年以降、経済情勢が改善され、年金積立金の要積立額が幾分減ってきています。

税効果会計

それから、税効果会計は、りそな銀行の政府資金の投入で問題になったものです。細かいルールがあつて説明しにくいのですが、一九八〇年から八九年の税法会計が全然適用されていなかった頃の数字ですが、税引前純利益と税金支払額、税引後純利益との割合を追かけていきますと、企業が払っている税金には結構ばらつきがあります。三菱自動車を見ますと、最大、税引前純利益の六八％の税金を払っているんですね。そうかと思うと一五・七％しか払ってなかった時もあったわけなんです。

三菱自動車は自動車産業の中ではそう安定した会社ではありませんが、せんから、こういうことが強くでるといったことがあります。トヨタとかホンダの例をとって見ますと、比較的安定しています。

財務力があつて安定している会社というのは実効税率はあまりぶれないんですが、不安定な会社は払わなければならない年はたくさん払わなければならないし、払わなくていい年には非

常に少ない額しか払っていません。これはいわゆる課税上の所得と会計上の当期純利益とのギャップによるわけです。そういうものを税効果会計では一時差異といいます。固定資産の過少償却とか貸倒引当金や退職給付引当金の有税引当とかで、会社のほうの解釈で、これくらいの費用を計上する必要があるんだけれどもということに計上していても、税務署のほうでそれは税務規則の限度額を超えていますから、そんなに積んでもらうては困ります、というふうに言われたものです。その年には損金にはならないけれども、次の年の損金にしたりすることができ

ると、先払いですから翌年の税金が安くなる、あるいは二年後の税金が安くなるとかによって穴埋めができます。税金の先払いは前払費用だとかと同じで、先払いしている分は将来節約できるんですから資産として考えましようということですが。一時、税務署にお金を預けているだけなんです。

繰延税金資産の計上

データベースで、二〇〇五年度の決算で一番大きな繰延税金資産を計上している会社を調べてみました。NTTですね。連結ベースでなんと一兆五千億円です。税金の先払いですから、NTTは将来五年以内に一兆五千億円を超える税金を払うつもりがあるわけです。それを二〇〇五年に先払いしてますよということを宣言してるわけなんです。将来そんなたくさん払うつもりがなかったら先払いになりませんから。そういう規模の金額を表示する根拠をもってるに

もかわらず、もし税効果会計を取り入れられなければ表示されないままになってきたでしょう。

NTTはちょっと例外かも知れませんが、皆さん記憶に新しいUFJ銀行が、東京三菱

銀行と合併に踏み切ったきっかけになったのが繰延税金資産の適正性を問われたことによりです。繰延税金資産として計上していた金額を、会計士からそういう繰延税金資産は適正じゃありませんよ、つまりUFJ銀行はあの時、三千億円規模の繰延税金資産をできれば計上したい、計上すれば何とか自己資本比率を向上させて急場を切り抜けることができると思つたわけですが、計上した上で監査を受けなければならぬというルールがありますから、監査を受けた結果それは不適正な計上ですよということになってしまいました。UFJ銀行がいくら頑張つたつて五年間で三千億円も税金を払うはずはないだろう、そうするとそれは先払いじゃなくつて既に払つてしまっただけの話、少しも資産じゃないですよというふうにいわれたわけですね。

銀行と合併に踏み切ったきっかけに例えれば千五百人の従業員が働いていて、その平均年齢が三十三歳ですよという事実にもとづいて年金引当金を計算するわけですが、それって帳簿に書いてる話じゃないですね。帳簿の中に書かれてる取引をいくら探しても、将来、企業が従業員のために年金資金をいくら用意しなければいけないのかという額は一年間の中の取引データには含まれてないわけです。

税効果会計についても同じです。たまたま税金をたくさん払った、今年支払った税金との差額を見れば漠然とわかるわけですが、それがそっくり繰延税金資産になるわけはありません。その中で将来、税金が安くなると思われる分だけ繰延税金資産として計上できるわけですから、将来をちゃんと見なければなりません。例えばNTTのよう

に一兆五千億円もの繰延税金資産を計上していても、グループ全体で考えれば、五年間で一兆五千億円あるは一兆八千億円とか二兆円の税金を払うんだから、その分の中の一兆五千億円が先払いになってるとい

とは妥当ですねと、公認会計士がいつてくれる会社もあれば、逆に単に五百億円であつても一千億円であつても、確かに払つてゐるには違ひないが、払つてしまえばそれっきりの税金、将来どんなに頑張つても一千億円を取り返すような利益があなたの会社からは出てこないでしょうといわれる会社もあるわけです。

そういう意味で新しい会計で何をしなければいけないのか。過去の取引情報を記録して整理するんじゃないで、将来の事業を予測するような情報を集めてくるということをしちんとやりましょう、ということを一九九八年から十年近くかけて一つひとついろんなことをやってきたわけです。そうすると貸借対照表の中身というのは違つてくるわけですね。

将来の経済的便益

資産というのは、将来、その資産を持つてることによつてどれだけの価値が稼げるかです。負債では、銀行から借りたお金は当然、返さなければいけません。社債は償還期限が来れば返さなければいけません。でも、それ以外にいろんな商取引上の約束で将来払いますよ、あるいはお金で払うんじゃないで将来

何らかのサービスや物で提供しますよと約束したもの、従業員の人たちに辞める時に退職金として払いますよ、辞めたあと年金として払いますよと約束したもの、そういうもの全て、将来の経済的な便益の流出として書かなければいけないのです。将来の経済的便益として獲得して得られたものと流出するものと

の差が、株主の手元で得ることができる経済的な便益です。この仕組みで貸借対照表を作つていきましよう、ということ。過去の取引をデータベースの中に蓄積してそれを整理してあるだけでは話が合わないわけです。将来企業がどういふふうな活動をしますかということをしちんと持つていなければなりません。

会計ビッグバン以降、また最近の国際会計基準という話の中でいろんな国が加わつて、いままでの貸借対照表、損益計算書では駄目ですよという話しをしてゐるわけです。その中には期中取引としてはつかめないデータですが、将来の経済活動をどのように決算で盛り込むか、この部分ははっきりいつて実務的にも未整備ですし、我々大学で教えたり公認会計士たちも一所

懸命考へてゐるんですが、おそらく将来こうあつて欲しいなというのを一〇〇だとすれば、まだ二〇か三〇のレベルまでしか来ていない状態です。ですが、それまで三点か五点だったものが二〇点か三〇点くらいにはなつてきています。まだまだやらなければならぬのですが、その優先順位を考えながらやつていきます。

その結果どうなるのか、将来の利益獲得能力というものに関するデータ、あるいは貸借対照表を著しく毀損するようなりリスクデータ、そういう大きな影響を与えるようなデータをきちんと表示するということ、会社というものを単に一期間でみていくんじゃないで長い目でみていくということになります。

従来は、過去の一年間の取引を蓄積してそれを整理するだけの会計、一年分をぶちっと切つて一年間にどれだけの資源を投入しましたか、その資源の投入によつて当該会計期間でどれだけの収益を得ましたか、これをみれば損益がわかるでしょう、こういう単純な見方をしてたんです。ですが、いまの企業ってこういうふうに動いてないですね。いろんな製品だとか市場だ

とかあるいは研究開発だとか、そういうプロジェクトが動いてきて、そのプロジェクトがある時点で一定の金額を投資して、一年半とか二年、三年かけて資金の回収をする、こういうことを考へてゐるのが本当の会社です。輪切りのデータで辻褄を合

わせるのではなくてプロジェクトが見えるデータを、株主やあるいは投資家、取引先に提供していきましようということ。これはあくまで私のような実務に全然責任を持つてない人間が、将来こうあるべきですよといつてゐるだけの夢のような話ですが、非常に大きく会社の経

彦根駅・大学間の専用バス運行開始

四月十日から、彦根駅・大学間の直行専用バスが運行開始された。「東京陵水」第九十号紙上での、獅山彦根市長との対談でも話題となつたバス運行問題も解決し、学生生活に寄与することである。

運行は、午前八時から午後九時まで（土・日・休日を除く）で、往と復で計三十九本が時間表に組まれている。乗車料金は片道一〇〇円である。



こんにちは

マブチモーター株式会社
常務取締役

羽瀨 展世氏（大14回）

〒二七〇—二二八〇

千葉県松戸市松飛台四三〇番地

マブチモーター株

電話 〇四七（七一〇）一一四三



話をお聞かせください。

——御出身はどちらですか。

羽瀨 兵庫県大屋というところ
です。一昨年大雨で被災した豊
岡市の近くです。山陰線で二、
三十分で京都府に入ります。二
年前から養父市大屋町となつて
います。

——悠悠自適の彦根時代

——滋賀大にお入りになったの
は関西のお生まれということも
あったのですか

羽瀨 就職にしろ大学進学にし
ろ、まったく疎くて自分で考え
たことは何もないんです。私の
兄貴が、たまたま一浪して一橋
に行ったのですが、滋賀大も受
けたのです。兄貴が受けたんだ
からいい学校なんだろうと。自
分で調べたということなど一切
ありませんでした。高校は八鹿
高校です。本校全体は千五百人
くらい、分校が多いため兵庫県
で一番生徒の多い学校で、全国
でも一番か二番に多かったこと
もあったようです（笑）。ひと
ころから受験熱が盛んになって
きて一生懸命勉強するようにな
りました。田舎の学校だから受
験にしても要領が悪い、我流で
何でもかんでも丸呑みでやって
まして、上の兄弟連中のこんな
勉強振りをみていたので、えら

い苦労して勉強せにやいかんの
だなと思っていました。

——大学は滋賀大一本ですか

羽瀨 いや滋賀大在学中を合わ
せて東大や京大も受けました。

——大学は何回卒になりますか
羽瀨 十四回の卒業です。卒業
は怠けていて四回生がダブって
います。ゼミは小倉ゼミでした。

小倉先生は夜ご自分の家で時々
やっていましたね。小倉先生の
お宅にいったのは一回だけです。

ゼミそのものに出了のも一回だ
けです。よく卒業させてくれた
なと思います。ゼミではちゃん
と優を呉れていましたね（笑）。

——今年五月の東京支部総会で
は小倉先生のご子息で、現在筑
波大学教授の小倉昇さんに特別
講演の講師をお願いしています。

羽瀨 小倉先生の奥さんが気さ
くでいらつしやって、昇君はま
だ小学校五、六年生でしたね。

夜中に我々が喋っていると時々
出てきて遊んでいましたよ。

——サークルはどちらでした
羽瀨 軟式テニス部に入ってい
たのですが怠け者であまり続き
ませんでした。あのころは入部
の目的がちよっと不純だったも
のですから。

——県立短大の女の子が試合の
相手にできるということですか。

羽瀨 そうそう、そこで軟式に
入っていたわけです（笑）。一
年半くらいでしょうね、入って
いたのは。あまり上達もしませ
ませんでした。学校の授業には全然
出ませんけど、テニスのほうは
わりと真面目にやっていました。

しかし直ぐに飽きがきちゃって。
——そのあとになにかおやりにな
ったのですか。

羽瀨 あの頃ワンダーフォーゲ
が、池洲橋を渡ったところで、
私より三年ほど先輩の阿閉さん
がいました。寮も一年ほど入り
ました。あまりにも風呂が汚く
なつてしまふと思つて出ました。

——就職試験は受けなかったわ
けですか。

羽瀨 受けたことはないです。
卒業して暫くぶらぶらしていま
した。

郷里で養豚業に汗

——先般、滋賀大でなさった講
演の中で農業と林業と養豚業な
どに携わつて何年か過したとあ
りましたね。

羽瀨 国許に山もありましたし
畑も田んぼもありました。した
がつて農業、林業をやらないや
いけなかったわけです。親父がや
らないんですよ。公務員だった
から勤めから帰ってきてからの



ルというのを、これは同好会で
すよ。私の同期の連中が一番最
初です。同級生が七、八人いま
したかね。それから一年ごとに
四、五人づつ入り、多いときは
二十人以上いましたよ。山登り
で遭難しそうなこともありま
しました。場所は御在所方面に
行った時でした。五月の台風ま
がいのものすごい大雨でテント
が流されて谷川のそばにキャン
プしていて、ものすごい鉄砲水

時間ですがそれ以上はできません。結局私がやっていいたんです。私は四男でした。

——どのくらいの期間やりましたか。

羽淵 それでも五年くらいやりました。本格的にですよ。養豚業では本腰を入れていたんです。自分で小屋も建てて十頭から二十頭を飼いました。豚は年に三回から四回仔を産むんです。一度に十頭以上産むでしょう。生後三ヶ月で百kgになつてから出荷するでしょう、だから忙しかったです。

——それからは一念発起されて、お父さんの期待に沿つてということですか。

羽淵 いやいや五年ほどやってきたところで休ませてくれと親父に言いました。ほかのことを一寸やってみないかと。

——そこで直通でこの会社へ

羽淵 いやあ二、三社受けましたよ。富士ゼロックスとか協同飼料など。飼料などお手の物でべらべら喋つていて注意されました。豚飼いにきたんじゃないだろうと(笑)。

マブチに入社、雄志を抱く

——最終的にはマブチモーターに縁があつたということですね。羽淵 そうです。その頃のマブ



チモーターは資本金一億くらいあつたかどうか、そのくらいの規模でした。ここ(松戸)は工場でした。人数は結構いました。日本に下請けの外注先を一杯持つていました。逆に海外の事業所は全然小さなものでした。僕はここの本社に一年しかないんです。海外に直ぐに出ました。

——ご自分の意志で行かれたと。

羽淵 行けといわれたから行つたということですが。多分行くことになるだろうと自分でも思つていました。一九七一年(昭和四十六年)に入社して四月に

当社に大きなストライキが発生しました。この年はニクソンのドルショック、スミソニアン協定、不景気と日本経済にとつて大きな曲がり角の年でした。当社には需給会議という社長、専務以下全管理職が出席する会議に入社四カ月でこの会議に出席

し「このままでは会社が危ない」と訴え、海外生産拠点の拡大を提案したのです。当時台湾にも

小さな工場があつた。香港にも小さな工場がありました。どっちにするかということではやはり香港をもう少し大きくすると、

そこでそういう案を作つたら「さうだそれを是非やれ」といわれました。今の会長さんにいいこ

というなとおっしゃつてもらつた。会社もバックアップしてくれるものですからやることになつて、向こうに設備投資をしなければならぬことになりました。

——いよいよゴーというところですね。

羽淵 結構下請け会社を持つていたのですが、香港をやるにあたり、こんなに下請け会社はいらないんじゃないかと切つてしまふということにした。結局残すところは残して殆ど切っちゃいました。どこを残すかというのも私の判断で残した。当時資本金が一億くらいだったのに五億円の設備投資でした。それが全部出来て結構大きなプレスとか計器とか色々な類のものを全部一式もつて行くことになりました。

荷造りが終つて、十二月には行くことが決まっていたのですが、そのまま年明けになつ



て三月一日に向こうに行きました。香港の工場はそのとき二百人くらいしかいなかった。暫くすると香港も何千人規模のものになりました。そのために機械等を送り込んだわけですから。それ以降三十二年近く香港と中国におつたわけです。

一九八五年、御巢高山の日航墜落事故のあつた年の夏に一度日本に帰つてきて家を建てました。そして香港の責任者が病気で倒れてしまった。そこですぐまた香港に帰ることになり、帰つて六カ月でとんぼ返りとなった。建てた家も売つてしまいました。

背水の陣を布いて香港、中国へ——家を売つたということは背水の陣を布いたということですね。

羽淵 そうです。もう帰るつもりもない、失敗したら会社にお

の想う通りできるまでは帰らない。こちらに一九八五年に帰つて来た時には中国(大陸)に進出しと、アイディアはもつていました。そのために一九七九年には下請工場を使って中国でいろいろなることをやらせていました。私は日系企業では最初に中国に出た人間だと思つていま

す。中国に下請工場を出して仕事をした日系企業の最初の企業はうちです。私です。こんな経験があつて、一九八五年に帰つたときにはマブチとして本格的に中国へ出ようじゃないかと言

い出した。二週間ほど中国の何処に出るかを調査しました。外注の名前ではなくマブチの名前で出ようと、それが決まつて、その時に香港の責任者が倒れた。そこで自分で「私が行くことになりましたよ」と申し出た。それで自分で勝手に打ちやりました。だから辞令がないんですよ(笑)。辞令をくれなかつた。後から辞令は出たんですが肩書きがない、責任者が倒れたんだからと自分で自分の辞令を出したということです。「じゃ私が行きます」と。本当は別

の人を会社が考えていたことも知っていますが。これは私しか出来ないよと考えていました。

そこで手を上げたわけです。周りでこんな人を行かして大丈夫かなと思った人もいたようです。当時は香港マブチは一大拠点でした。最初に行った時には二百人足らずの小さな会社でした。私が二回目に行く時には香港で日系企業としては一番沢山儲けてる会社になっていて、東京銀行でも野村證券でも三菱商事でもなかった。一番はマブチだったんです。その責任者で行くことになった。四十三歳で任に当たったのだから大冒険だと思います。今の会長が社長になって間もなくでした。

成長街道を驚進

——どのくらい経ってその規模になりましたか。随分急成長を遂げられたわけですね。

羽瀨 十二、三年くらいですかね。二千五百人くらいの工場と千人くらいの外注でしたから。香港でマブチの名を知らない政府の人間はいないくらいでした。私が行ってから暫くしてナイトの位を持つ香港総督によばれて一緒に食事をしました。最初にいったときにはとるにも足らない規模だったが、その頃には香港一の日系企業だった。帰ってから半年で出た時には辞令も出ませんわ、こんなのはんと

に大丈夫かなと思っていますから。肩書きもない。帰ってくる期限もなかった。明日帰すかも知れんしずっとおらすかも知れんし、それは判りませんでした。

——小説の題材になるような体験ですね。ある時期になったら肩書きがついたんでしょう。

羽瀨 知らないうちに付きましたね。私が行ったのは責任者です。香港マブチ社長ということ。総経理、社長です。何か知らないうちに総経理という名前が付いていた。最初の一年くらいはあいまいなままで、知らないうちに自他ともに認めることになりました。

——急成長した理由はどんなところにありましたか

羽瀨 一つは香港そのもの、そのすぐ成長しました。香港はそのころニーズとか言われて、これからは香港だ、シンガポールだ、台湾だ、韓国だといわれて勢いづいてきた。経済がものすごく大きくなったわけです。ところが人件費が毎日のように上がってくる。あつという間にとんでもなく高い人件費になった。二、三年で上がって行った。香港で物を作っても採算が合わぬ、しかし香港のお客さんはメ

イドイン香港でないと困るといふ。シンガポール、インド、香港、オーストラリア、カナダなど昔の大英帝国間の取引は全部無税なんです。そういうところに売るのはメイドイン香港で売ったほうが関税がかからない。そこでそれ以外の国向けには台湾に作らして香港にもってきて売っていた。香港は自由都市ですから香港では利益を自由に本社の意向で処理できるが、台湾では規制上そこに落ちた利益は簡単に処理できない。だから売上は香港マブチの売上にし

て台湾は香港マブチに売って、香港マブチがお客さんに売る、お金は香港マブチに入る、オーダーは台湾に行く、という仕組みです。所謂三角貿易ですね。そうしないと人件費の高い香港ではやっていけなくなっていた。そこで中国でやろうじゃないかと話がでた。香港の隣りの中国だったら六分の一の人件費で出来る。中国に進出しよう、一九七九年頃です。本社のトッ

プはやってみるというんです。私も中国でやるべきだというんですけれど、その頃の香港マブチの責任者はあの共産圏の国に設備を出しても全部取られちゃうだけだ、と全然やる気がない。しかたなく香港で私がコントロールして外注でやらしていたんです。中国に小さな工場を作らせて主に部品を作らせていた。従って比較的私は中国のことを知っていた。一九八五年に日本に帰った時、元香港の責任者に強く中国進出をすすめたら、やろうやろうと言います。自分が香港にいて責任があつた時には、そんなものやれるかといっていたのに、こっちに帰ってき

て他人の責任になったらやろうやろうというわけです（笑）。調査を終えて何十ページかの報告書を一日で作りしました。二時間くらい社長（現在の会長）に説明をしたら「判った、やろう」、それで決まっちゃった。

——中国進出がですね。

羽瀨 意見具申まで十日以上かけて数十件の現地調査をして、絶対これからやるべきだと出したんです。それがうまくいってやって社長がやろうということになった。そこで契約書を作ったりして計画を進めた。そして香港の責任者が倒れちゃったもんですから、じゃあ俺しか出来ないかな、と思って私が行きますとなった。これは一九八五年の終わりでした。行ったのは一九八六年の二月です。二〇〇三年に帰国する間に中国に十

カ工場を作りました。また情勢の変化を見ながら工場の閉鎖や統合をしてきました。いまは全部で四カ所になっています。どの工場も人は一万人規模の大工場です。今は景気も悪くて全体で三万人くらいしかない。一番多いときには三万七千人くらいいました。ストライキも起き

——ストライキなどは起きない。彼らから見たらこの会社は自分の会社ですからね。自分の会社を悪くすることは絶対しませんよ。そのように仕向けるのに五、六年かかりました。

——国際社会へ貢献は「人を育てる」

——工場のトップなどは全部中国人ですか。

羽瀨 そうです。日本人がちょこちょこつといるけれど後は工場長以下全員中国人です。社長に二人日本人がいます。そのほかの日本人は中国人の部下です。対日感情問題はうちの会社では起きない、絶対おきません。一九八五年から始めて、八八年、八九年とストライキばかり起きていました。それを見て、こんなことをしては駄目だ、何かこの状態から抜け出すことは出来ないかと考えました。そこ

で気がつきました。うちの会社には経営理念があつてそれは国際社会に貢献することをうたつてゐるのです。(経営理念「国際社会への貢献とその継続的拡大」——一九六四年制定) これなんだと、うちの会社はもう日本では物を造っていないんだ、物を日本で造っていない会社が外国で生きてゆくためにはこの理念をほんとに生かさないとけない。日系企業だ、日本人の会社だといつても生きていけない。それぞれの国の工場はそれぞれの国の工場で、自分たちの工場だ、うちの会社だという思入れをしないと潰れてしまうと思つた。それからずっと六年間くらい徹底的に教育しましたよ。毎回毎回百数十人集めて半日使つてどんどん教え込むし、管理体系を作つてこの会社の狙いはこれだ、成功を狙うんだつたらこれとこれをやればいいんだ。二百くらいの管理指標を全部矛盾しないようにきちんとしたものを作つて、これをよくするためにこれとこれをやればいいんだ、この数字をこうあげたらいいんだと全部教え込んだんです。教えるのに何年もかかったのですが。あの頃大前研一さん等いろんな人が会社に

来て「こんな会社が中国にあるのか」。もつとすごいのはGEのジャック・ウェルチという超有名な経営者の一番弟子スリー・エム社のジェームス・マクナニという人が、「スリーエムが今やつてゐるシックス・シグマとはまさしくこれだ」と評していました。徹底的にとにかく説きまくつて、会議を開くと実績を全部出させて、これはどうかと全部問い詰めていった。その意識がどんどん強くなつてくると、彼らはこれでやつたらうまくいくと判つてくるのです。国際社会に貢献するということは具体的になんだらうと、何をもつて国際社会に貢献するんだといつたら、それは人を育てるんだ、貴方が育てば貴方の生活が良くなる、貴方の会社が良くなる、払う税金も多くなる、税金は貢献を表す。要は人を育てて会社が良くなる、結果として国際社会が良くなる、自分の会社だと思わなければ良くなることが出るわけはないだらう、ということを徹底的に教えました。また香港ではこの会社を香港で一流企業にする、マブチは確かに香港では有名だけれど一流でないものが沢山あるだらう。貴方の給料は一流か、一流

じゃないだらう。それを俺が一流にすると約束したわけですね。全部にそういうことをしました。あなたの能力は一流か、ほんとに管理能力は一流なのか、ほんとに頑張つて一流になつたら会社も一流の給料を出さうじゃないか、そうやってきました。まあほんとに高給取りが一杯出来ましたね。

——そりゃやる気になりますね
羽渕 やる気になります。男も女もないんだ。国籍も関係なし。年寄りも若手も関係ない。言つたことは必ず守る。若手の女の子の部長もいる。実績を見てやつてゐる。女の部長も実際いっぱいつくりました。

——幹部クラス以外に実際現場で作業して働いてゐる者に対しての教育はどのようですか。
羽渕 直接その立場の人達を教育をしたことはいませんが、言つてゐることを態度で示す行動が必要で。口で「汚れてゐるところがあるから掃除をなささい」と言つてもやりません。例えやつたとしてもそこで終わります。そうではなくてこちらが箒を持つてきて自分で掃くなどすると、一番偉い人がそれをするのだからと納得する。常に顔をあわせば挨拶をする。汚れていてゴミがあつたら自分で拾う、この人は裏表なくやつてゐる。やつてゐるところを見れば何も抵抗感を持たない。言われてやるのはものすごく抵抗を感じてやつてゐるはずで。

——同業との競争はどうでした。
羽渕 あそこ地域だけでマブチと同じようなモーターを作つてゐる会社は今では百社はあります。世界中のモーターの八十パーセントはあそこ(香港、中国広東州)で作られてゐます。そこでマブチ一人勝ち作戦をやろうと皆の前で広言しました。これだけのことをやれば絶対勝つといつてこの作戦を展開しました。その頃は完璧にそのとおりになった。当時は同じマーケットで勝負して絶対負けな、負けるわけはないということ徹底に教えた。そのかわりこれだけの事はやろうと。矛盾するものは取り込んでこない。うちの会社で一番大事なものは何か、それだけ追つかけていこうと。私の場合はROA(投下資本収益率)だったです。これをやればこの数字はよくなる。皆に数字を追つかけさせました。それを全部グラフにしなすてね。グラフだと見た瞬間にわかります。グラフは毎月毎月同じものをずーつと掲示する。グラフにコードナンバーを振りました。このグラフはこういう形になつて目標はここに来たら私のところは成功と。そしたら間違ひなくどこから見ても成果がわかるようになる。

——このことは中国人の国民性が表れてゐるんですかね。ベトナムでも同じような指導を。
羽渕 皆賢いですよ、どこの国の人も。ベトナムではまだ同じような指導はしていません。やれとは言つてゐるんですが。うのは一つは言葉の問題があります。中国は日本語を喋る中国人もいますが、日本人も中国語は大體喋れるんです。ところがベトナムに行つて日本人にベトナム語を喋れといつても、あれは発音が非常に難しいものです。中国の広東語にそっくりです。それがあつて自分たちがベトナム語を習つて指導するよりも、あつちの人間に日本語を教えたほうが手取り早いということになつてしまふ。ほんとうはそれではやつぱり駄目なんです。一番大事なのは現地化です。そういう意味で現地化を最初に唱えたのは私です。はじめて報告書に現地化をするんだ

と。現地化といっても当時だったら日本人が現地人と結婚して現地に住むということなどを現地化といっていた。英語はロー

カリゼーションですから英語ならわかりやすいが、それではだめで、私が勝手に現地化といった意味は、技術者と管理者を育てて現地人による技術と管理のレベルを日本と同じ水準に引き上げるということです。確かにそうなりましたし、あそこの工場を動かしているのは皆中国人なんですが、どこから見ても立派な管理者だし、技術者です。

広がる国際市場への対応

—— 将来インドとかロシアとかに目を向けていますか

羽瀨 目先はベトナムです。中国一辺倒で中国の比重が大きくなりすぎていますから。

—— ベトナムにはこれからの可能性、伸びてゆく可能性があるとみておられますか

羽瀨 ベトナム人は勤勉で賢いのです。中国人ほど「俺が俺が」というところがない。覇気がないように見えるが皆と一緒にならよくやります。特に技術系の人達は頭がいい。なんでもこなしてしまふ。そういう意味で目

先にはベトナム拡大が優先します。ロシアやブラジルはベトナムから輸出できる。インドは既に大きなマーケットですが、法制上の問題や日本人の感覚から問題やカーストのような習慣上の問題とかネガティブな面を主張する人が多すぎて、未だに進出してないが、当社から見るとんでもない大きなマーケットであることには違いないと思いますね。どこの国でもそうですが、企業が外国に投資をするということはその国の企業に

なりきることです。中国であれ、どこの国であれ、その国に投資をするということは、基本的には失敗したら「元」は帰ってこないということを覚悟することですよ。後進国や開発途上国へ投資をするということとはそういうことだと思いますよ。

—— 中国で仕事を長い間されてそこから得た教訓はどんなものですか

羽瀨 どこかを芯にするということですか、テコにすることです。



中国人は外交的に頭がいいからそういうものをフルに活用する能力をもっている。例えばマブチは広東地区に一番最初に出た。そのことをかれらは最大限に使っている。マブチが羽振りがいいといわれているときには、マブチは大成成功していますと言います。このことをいいことにつけ悪いことにつけものすごく使う。天安門事件の際、

広東省が内乱状態になっていた、鉄砲を打ち合う状況になっている、などという噂が飛び交った時に、他の会社では工場を閉めて帰ってしまった。

私は「内乱がデマか本当かもはつきりしない状況で工場閉鎖など出来ない」と社内を押さえ

ていたが、日本人も香港人も青くなつて、「従業員の命に関することではないか、総経理の独断で工場を閉鎖していくのか、即刻工場を閉鎖してくれ」と日本人

総工場長を先頭に詰め寄られる騒ぎになった。結局マブチだけが操業を続け、他の日系企業や香港企業など殆どが操業を停止し、日本人も香港人も香港に引き上げてしまった。彼らはその

後二週間に亘って中国に入ることはなかった。後に中国の東莞市や深圳市はこの事実をフルに自分たちとマブチの宣伝のため

に使った。自らの武器やツールになるものは徹底的に使い利用する。それが彼らの流儀だし説得力があるということですよ。

—— 陵水会と家庭

—— 陵水会の印象ご意見を伺いたい

羽瀨 私は日本にいなかったし、陵水会員としてはいわば住所不定になっていました。二〇

〇三年に帰ってきたのですが、これからの陵水の関りはどうでしょうか。皆さんの足手まといにならないようにお付き合いさせていただきたいと思っています。よろしく願います。

—— 今ご家族は

羽瀨 こちらにいます。香港でもずーっと一緒にいました。最初に行った時は独身でした。世話してくれる人がいて一年少

しから結婚してそのときから香港にいました。一男一女の子供達も中学までは香港で

した。高校がアメリカの高校だったり、香港ではイギリス系の中学に行っていました。日本語は上手ですが漢字が全然書けないとか、文章が書けないとか、広

東語は言葉だけですが、英語の学校に行くようになると、英語で文章が書けるけれど日本語では書けないとか、漢字がなかなか読めないとか、暫くそういう時期がありました。息子は日本語一辺倒で香港で中学が終つた

ら高校で日本に返しました。ですから全然問題なかった。娘のほうは大学になってから日本に

帰ってきました。

—— 今日はいろいろと広範囲にわたり有意義なお話をいただきありがとうございます。

還暦からの

ピアノ・油彩・水彩

尾本 政二（大8回）

ひっそりと自分だけで老後を楽しめればいいと始めた全くの個人的趣味のことなので、人様に披露するほどのことではないのですが、先日同期会でダベッテいたのが編集子のお耳にとまり、投稿依頼をうけてしまいました。参考にしていただければ幸いです。

「仕事以外にも何か打ち込むものを」とはよく言われていて、私も前から絵画とピアノをやりたいと思っていたのですが、凝り性の私のこと、現役中に何か始めたら仕事にさしかえかねないので、土日にテニスをやるぐらいで、後は定年までのお預けとしてきました。そうして六十歳。いさぎよく退職し早速翌月からピアノのレッスン、翌々月から絵画の勉強にとりかかりました。

まず絵画のほうですが、自宅のある中央線沿線の絵画教室を調べ上げ、油彩・水彩・デッサン・抽象画のそれぞれ毎の入門教室に通いはじめました。これらの絵画教室は生徒の殆どが中年女性で、何年も「入門」講座

を受け続けていたりして概して女性は先生を替わることに臆病だと感じました。先を急ぐ私はこれに付き合っておられないと、少しづつ上のレベルとされる教室に乗り換えていきまし

た。一部には期待はずれで半年で打ち切ったり、抽象画教室のように自分にはやはり肌が合わない

と、早めに退散したのもありました。特に水彩画では国立在住のH画伯の個展でその画風が気に入

りその方のアトリエで個人指導を受けました。画家は普通自分の描いている手の内は見せない



もののですが、その方と並んで同じ題材を描かせてもらおうという一年半（週一回）の経験は貴重

でした。油彩画では新宿のA教室がカリキュラムもしっかりしているし題材も毎回充実したものが用意されていて「キチンと勉強した」という実感をもて

ました。このようにして絵画について

は三年間、習った先生の数にして九人、という駆け足の勉強を

し一段落と思っていたところが、タイミングよく再就職の話

が舞い込みました。経理財務処理の仕事で、出勤は月末月初以外

は繁閑を見てやり繰り可能な

ので趣味活動を続けながら働くことにし、地元三鷹市の会館で

活動している油彩と水彩の同好会に入会しました。それぞれ年

に何回かの展示発表の場もあり、もう五年になりますがこの趣味は結構あきることがありません。



今春の五陵会

細井 恭一（大5）

恒例の山歩きは、五月二十五日、六日、緑の軽井沢と相なつた。軽井沢の駅を降りるとひんやりとした冷やかさが感じられる。高原の五月だ。そしてまず駅舎の変わりように驚かされる。明治クラシックを代表するような、あの気品ある建物が、新幹線開通とともに近代的といおうか他の新幹線の駅並となつてしまったのである。ただ噴煙の浅間山はどかっと居座つて昔のまま。駅前発の草軽交通のバスに乗る。旧軽井沢を通り三笠通りを走る。美しい新緑の落葉松の並木道路を走っている



と、雨上がりの新鮮さも加わつてか、心が洗われる思いがする。今回の例会はハイキング組が七名（天田、龍口、中川、中西、樋上、久木、細井）、ホテル直行組が三名（青島、市来、間宮）計十名である。バスは二十分も走つただろうか小瀬温泉につく。鮮やかな緑につつまれた空気の美味しい山の中である。ここから歩いて十五分、自動車道（白糸ハイランドウェイ）と並行している山道を行くと「竜返しの滝」に出る。ここで記念撮りなどして休憩をとる。そして次の目的地「白糸の滝」に向かう。登山道はときには上り、ときには下り、そして絶えず山道のはるか下には谷川が流れ、せらぎの音が聞こえてくる。水量は豊かだ。婆婆の騒音から抜け出したのどかな世界である。途中の景色は誰が言つたか「緑のシャワーを浴びているよう」だった。みずみずしいミズナラ等雑木、白樺、落葉松、山つつじ等、地上の草花と共に目の前は一面緑のカーテンだ。ところが昼食をとる適当な場所が見つからない。腹が空いてきたが気分は爽快である。ただひたすら歩き続ける。途中、下の谷川を何回か横断する。そうこうしている内に、一時半過ぎ頃だったろうか、遂に白糸の滝の茶店の屋根が見えてきた。そして茶店

の前を少し登ると「白糸の滝」だった。大して高くはない半円形の岸壁から湧き出した水が無数の白糸のようになつて流れ落ちていく。その様は見事であり、一見の価値ありである。ここでもうやく昼食。ビール、おにぎり、うまいこと、うまいこと。ゆっくりと休み、最終目的地「峰の茶屋」を目指し出発。ここから先は車道や谷川と離れ、なだらかな登りの山道となり、白樺等混じえた雑木林、あるいは落葉松林等落葉樹林が続く、野草も美しく萌え、色づき、森林浴を満喫する事ができた。秋の紅葉時期もさぞかしと思われる。三時半ころ「峰の茶屋」（標高一四〇五米）に着く。ここは白糸ハイランドウェイと国道一四六号線の交差点になっており、ここから鬼押出しや中軽井沢へも出ることが出来る。因みに我々の歩いた道は「信濃路自然歩道」の核心部分である（標高差三〇五米、距離にして七・五キロ）。ホテルは北軽井沢の「ハーベストクラブ軽井沢高原」（中西君がメンバーの会員制ホテル）で中西君には大変お世話に相なった。

噴煙を上げる浅間山を近くに望み、ゴルフ場や大草原牧場等に囲まれた素晴らしい環境の中にある。翌日は軽井沢に戻り、軽井沢銀座ほか万平ホテル等を散策した。途中天皇が若かりし頃美智子妃と結ばれたという、ゆかりのテニスコートもあった。最後に皆「このコースは本当によかった。七十歳台の我々にとって最もふさわしいハイキングコースであった」と異口同音に褒め称えていた。企画してくれた龍口君に感謝感謝。



満開の桜の下、 三年ぶりの邂逅に酔う

大学八期同期会

在学の頃、四月の十六日にはもう葉桜に進行していた桜である。開花が全国的に遅かった今年の桜は彦根でも例外はなかった。桜祭りで賑わう駅前に次々と同期生が降り立つ。卒業後平成十二年度までは五年ごとに開いていたこの会は三年ごとに開くことが決まってからの二回目。

会場の彦根カンポの宿に集合したのは、四十二名、現存同期生の約二十八パーセント。午前十時から、開会に先立ち会場玄関前で記念撮影をする。今回の当番は東京組だったので天木

今回は三年後、幹事役は大阪組である。天木司会の一本締めの手拍子で午後二時半に閉会となった。

会場正面ロビーに塊りができる。母校、彦根の町の変貌、彦根城と。訪問先も決まり別れの挨拶を交換して会場を後にしていった。

(林史欣記)

本紙前号の訂正について

本紙前号(第九十号)の掲載記事について次の通り訂正いたしますとともに、関係者の方々にお詫び申し上げます。

①「陵水会東京支部規則の全面改訂について」欄。二ページ本文十四行「改定」を「改訂」に訂正。三ページ本文七行「行なわれた」を「行われた」に訂正。本文九行「第二章に組み入れる」を「第二章に組入れる」に訂正。本文十三ページ「行なわれた」を「行なった」に訂正。

②「ゴルフ談義」欄。十一ページ見出し「平成十七年六月六日(日)」を「平成十七年九月六日(火)」に訂正。本文一行「六月四日」を「九月四日」に訂正。十二ページ「成績」の項、「松浦幸作(本8)」を「松浦幸作(大8)」に訂正。



第六十五回東京陵水ゴルフ会 平成十八年四月四日(火) 金乃台カントリークラブ

穏やかな春の好日

花便りしきりの一日、ここ金乃台も桜に、花桃が咲き誇り、前日の強風もピタリと止み、絶好のゴルフ日和。本年初で当初申し込みは三十八人、急な都合などで、ホールアウトしたのは三十三名(九組)でしたが、満杯の四十名の日も近いのでは？

先着順なので参加申し込みは早くにどうぞ！

参加年代も一九四四～五十年代生まれが参加、いわゆる団塊の世代組もこの二～三年に急増することから、常時四十名大会の嬉しい盛会になりそうです。

優勝は大学十六回(昭和四十三年卒)の木戸君、参加の最若手組です。

今回は六月二十二日(木)に開催します。梅雨の晴れ間を期待。

新参加希望者募集！

大学十五回卒 山本 保氏
(〇四七―三三七―四七八〇)

までお電話ください。今回のゴルフ会から、ご案内状をお送りいたします。

成績

優勝	木戸 彪(大16)	62(32)
二位	箕島 安夫(大4)	67(19)
三位	三井 照次(大10)	70(10)
四位	畠山 義生(大10)	70(13)
五位	名口 幸夫(大14)	71(3)
七位	富田 博司(大15)	73(10)
十位	志井 重雄(大16)	74(18)
十五位	三宅 義男(大6)	79(19)
二十位	山本 保(大15)	80(23)
二十五位	井口博民(本22)	83(17)
三十位	浦谷政夫(大7)	92(23)
BB	大久保義雄(大6)	95(14)
ベスグロ	名口74	
ニヤピン	井口 富田 山本	
	川合(大11)	
大波	岡田(大2)	
水平	北澤(短5)	
参加者	三十五名	(箸方記)

第六十六回東京陵水ゴルフ会 平成十八年六月二十二日(木) 金乃台カントリークラブ

梅雨の雲間で

毎年恒例の六月開催は、関東地方の入梅前の第一週が望ましいが、今回もスタート前まで降ったものの、スタート時には止み、先ず先ずの好コンディション

に恵まれた一日でした。思ったよりはグリーンが遅く、もとの高麗のようにカップインの手前でストップするなど、スコアは伸び悩んだものの、ローハンデの実力者が上位を占めたのはさすがでした。今回も当初三十五名の申し込みでした。大学15～16回卒の増えてくるなか、同期柴田さんのお誘いで、大学2回の水引、四塚両氏が初参加、うれしいことでした。今回は九月十九日(火)、早めの申込を！



優勝	富田 博司(大15)	70(10)
二位	名口 幸夫(大14)	72(3)
三位	柴田 茂夫(大2)	74(15)
四位	坂田 忠夫(大9)	75(22)
五位	吉原 悟一(大9)	71(19)
七位	岡田 巖(大2)	78(22)
十位	志井 重雄(大16)	79(18)
十五位	鶴見 芳令(大15)	81(20)
二十位	西沢 正本(大24)	85(16)
BB	橋本 長夫(大6)	92(15)

ベスグロ 名口75

ニヤピン 山本 孝之(大9)2、名口、田村(大12)、志井、北村(大14)

大波 西沢

水平 岡田

参加者 三十一名 (箸方記)

東京陵水会囲碁会便り

六月十七日(土)、全国情報サ―ビス産業厚生年金基金会館で開催しました。今回は常連の棋士のご都合により欠席される方が多く、十五名とやや寂しい大会になりましたが、終日熱戦を繰り広げました。

優勝は、畠山義雄五段(大10)が二位は用田政二二段(大3)、三位は細井恭一初段(大5)がそれぞれ獲得しました。大会後懇親会に移り、熱戦を振り返りながら、話に花を咲かせて散会しました。

なお、大会参加を希望する愛好者がいましたら是非幹事までご連絡ください。次回は十一月に開催を予定しています。

幹事連絡先・電話・FAX

〇四五―九四一―一七六一
E-mail: gokichi@topaz.ocn.ne.jp

三井照次まで

彦根コンプライデンシャル

—— 滋大陵水新聞会

新年度が始まり、数ヶ月が経った。一回生も大学に慣れてきた様子で、新しい環境の中で意欲的に動いている。部活動も新歓の時期を終えそろそろキャンパスが全体的に落ち着き始めた今、話題にあがることと言えば、アルバイトの話題だ。先輩の経験談やすでにアルバイトを始めている同学年の意見など、いろいろな情報が交換されている。今回は滋賀大学学生にアンケートを採り、そのアルバイトの実態について調べてみた。

まずは、大学入学後にアルバイトをしたことがありますかという問に対して、七十九・三%の人がしていると答えている。現在はアルバイトをしていないという人も含めて、約八割の人がアルバイトの経験があるということになる。また大学入学後、いつからアルバイトを始めましたかという問いに対しては、平均すると入学して六・五ヶ月後。つまり一回生の十月～十一月頃からが滋賀大学では一般的であるようだ。とはいえ、回答

のバランスを考え、何に時間を割くかということもいつアルバイトを始めるかを左右しているように思う。

次に、アルバイトを選ぶ基準について訊ねてみた(複数回答)。すると、やはり一番、気になるのは給料であるようだ(五十六・九%)。次がアルバイトの内容(四十三・五%)、スケジュールの都合(三十九・五%)と続く。また意外に多かったのが地理的な理由で二十七・九%を占める。下宿先からの近さ、実家・地元からの近さというのがその理由である。特に彦根に下宿をしている一回生は大半が自転車移動する場合が多いため、同じ下宿先の先輩に近いバイト先を紹介してもらうということもあるようだ。次に具体的にアルバイトの内容について、一番多いのが飲食店(三十%)、次がコンビニ・スーパー(二十四%)、家庭教師・塾講師(二十三%)と続く。この中でも最近よく聞くアルバイトはコンビニだ。コンビニは全国各地に点在し、同じ市内であっても数が多し。労働環境として、どこのコンビニは給料が良く、店長の人柄がいいのか。またその他でもどのコンビニのど

んな商品がよく出ているかが話題に上がる。コンビニで働いている人同士の話題にもなるし、働いていなくてもオスメの商品の話で盛り上がる。因みに私の周りでは特にコンビニの朝勤(早朝勤務のアルバイト)をしている人が多い。時間が早い分眠いし商品の陳列作業もあるが、お客が少なくのびのび働けるのだそう。場所によっては働く人が少ない店舗もあるらしく、口コミから周囲でどんどん広がっている。その他、内容としてカラオケやパチンコ、ラジオパーソナリティ、新聞配達、近所の神社での短期アルバイト、学内でのSAなども挙げられていた。

平成十八年度年会費納入者

(六月五日現在)

口座引落とし制度の手続きを完了し本部会費とも七月に納入予定の方は氏名横に傍線を引きました。

高安規玖次(本5)、岡 伸好(本10)、佐田健造(本13)、船見裕治(本15)、井上誠五郎(本17)、清原茂平 山廣 新佐野志郎(本18)、石田定夫 小林満男 高木克幸 古山利誠(本19)、葛上宗一郎 田波隆興 辻 暢夫 山口輝朗(本20)、相道 章 井口博民 梅沢誠質 河添治男 竹内政太郎 土田 茂 豊田弘毅 鳥居和也 中辻 喜蔵(本21)、伊藤亮三 高山 義雄 多賀芳則 丹羽鑑治 橋本 侃 林 輝治 山口昭夫 山崎昭雄(本22)、瀬川泰助 西尾 實 西田延弘 前川彌之 祐 松本 義(本23)、大竹徳行 加納淳司 楠田迪彦 高木 早苗 中林 肇 西澤 正 矢田佳三 保正 保(本24)、奥

村忠雄 井上泰一 川瀬孝太郎 宏 後藤利彦(大7)、西村 市岡隆治 今津松男 影山哲也
(東)、市川博史 落合忠二(別)、信 天木清次 池田弘孝 小塩 武邑邦弘 田中和夫 西川清悟
橋本久米一 三上清一 外江龍 正長 尾本政二 小森清美 瀧 (大18)、中村達夫 戸田保延
太郎(工)、井上祐一 内海清 川雅一 刀裨館信雄 林 史欣 宮川 誠 門平孝二郎 和田博
安 川本 茂 小池英夫 外村 松岡健雄 安田一雄 渡辺芳秋 之(大19)、岩谷克敏 平井善
英造 渡辺貞二(大1)、岡田 (大8)、小野 浩 日下部百也 三(大20)、植野克美 脇坂
巖 亀井潤吉 郷 治雄 柴田 田川行雄 中島勝司 西田広彦 守 山下修二 米山 修(大
茂夫 新宮 毅 刀裨館治男 平瀬武明 藤本裕一郎 山本孝 21)、小林忠志 山脇一泰(大
水引芳雄 白木昭雄 四塚行雄 之 宮田 昭 吉原悟一(大 22)、稲波信一 深谷靖純(大
渡辺陽彦(大2)、田中 博 9)、井上義隆 小塩 守 佐 23)、徳山 均 湧川勝巳 斎
神崎栄次 小八木俊雄 清水克 藤秀孝 田中俊男 坪田清六 藤裕士(大24)、田村弘昭 安
純 清水善和 中川弥次 野口 豊原憲二 中川寿一 中村寿男 井喜重(大25)、高瀬 豊 松
泰良 増田茂樹 矢野 昭(大 畠山義生 服部全孝 細谷 隆 下浩一郎(大26)、岡野茂樹
3)、青山松太郎 今井常清 山田 進 山田宗弘 山本啓司 天野利昭 辰農雅司(大28)、
粕淵健三 北川 享 佐々次郎 白井 健(大10)、川合久嗣 浅見 徹 吉本準一(大29)、
田岡譲一 竹内鋭二 谷 文夫 関 恵文(大11)、稲邑明也 藤原洋一 和田昌信 浅野卓也
辻 昇平 樋上不二子 寺尾睦 守谷貞夫 田村寿夫 平居俊雄 (大30)、正面順久(大31)、小
三 寺田又三 中島義男 箸方 堀井幸夫 山口和俊(大12)、林智子 酒井康就 岩田雄一
海三 原沢伸治 廣内士郎 福 朝比奈冬男 内山晃廣 小林三 (大32)、清塚 徳(大33)、岡
本俊昭 松岡正曜 簗島安夫 郎 近藤達也 中村奎吾 星出 武俊雄(大34)、鈴木 誠(大
安江郁夫(大4)、天田志郎 潔 若山 忠(大13)、小口 進(大38)、原 弘(大39)、立
飯島 勲 岡田和義 神谷 亨 晃 葛山 薫 古山捷二郎 田 木賢一(大40)、山本雅由(大
井上明郎 龍口秀夫 中川郁三 中泰弘 土井健一郎 中村 弘 42)、清水俊彦 日高信次 刈
中西三一 樋上泰功 平野 広 野村英機 古川浩司 丸居 裕 谷忠彦(短) 計二百七十一名
細井恭一 間宮昌蔵(大5)、(大14)、奥村勇雄 鈴木 勝 (納付率十四・六パーセント)
今宿隆弘 白井 靖 大久保義 柘野茂樹 富田博司 細江譲夫 事務局から
雄 岡田 亨 河合正紀 川村 馬島惟安 吉田勇夫 藤本幸延 十八年度を前納された方、本
和男 草生知治 小林仁美 中 木下英男 山本 保(大15)、年四月一日から六月五日の間に
村博一 林謙治郎 久木義雄 木津勝治 木戸 彪 浜口栄治 お振込をいただいた方、五月十
三宅義男(大6)、磯部一郎 (大16)、大原和夫 岡本和之 六日の総会出席時に直接いた
市川浩久 宇治原嘉政 浦谷政 川崎憲夫 蔵田昭憲 栗林 昭 いた方々は右の通りです。どう
夫 佐野 了 鈴木重成 高木 柴原良昭 豊田徳司 西尾郁夫 もありがとうございました。未納
巖 竹村孔作 富永義孝 西野 良本在慶 若山典男(大17)、

の方は同封の払込取扱票にてお振込くださるよう宜しくお願い申し上げます。なお年会費は支部、本部とも同額の三千元です。

編集室

高安規玖次氏が亡くなられました。氏の支部長時代、支部の使い走りでも何回か高安株式会社さんへお邪魔したことがあります。会社経営の傍ら、支部の活性化と発展のためにご尽力いただいていたことが思い出されます。惜しい大先輩を亡くしてしまいました。ご冥福をお祈りいたします。

さて、我々 現編集スタッフ が本紙を担当して、はや八年が経過しました。支部長は川本さん、小池さんから宇治原さんにかわり、高安さんが培って下さった支部活動は脈々と受け継がれております。その間、本紙は編集の未熟さから会員の皆様にはもう一つというところかと思っております。

スタッフの高齢化?のため、老害をばら撒かぬよう努めます。本紙の今後の発展のため、忌憚のないご意見をお待ちします。

(M・U)

陵水会東京支部
ホームページアドレス
<http://www2.ocn.ne.jp/~ryousuit/>

「会報」原稿・情報のご送付先

林 史欣(大8回)
〒164-0014

中野区南台二一五一一〇
(TEL・FAXとも)

〇三―三三八一―四四三一
※編集室のメールアドレスは
chikayoshiyb@yahoo.co.jp

(次号分〆切日十月末日)

発行所

〒236-0004

横浜市金沢区福浦1-14-9

守谷輸送機工業(株)

陵水会東京支部 支部長 宇治原嘉政

電話045(785) 3716

印刷所

〒110-0015

東京都台東区東上野1-28-3

船舶印刷(株)

電話03(3831) 4181